

「幸福度世界一」の国、オランダの教育に学ぶ

前ロッテルダム日本人学校 教諭

大分県中津市立山口小学校 教諭 吉 瀬 亜希子

キーワード：やり直しのきくシステム、オートノミー、ワークシェア

1. はじめに

日本から遠く離れたオランダの地で勤務するという貴重な経験を得、「幸福度世界一」といわれるオランダの教育から学んだことを紹介したい。

2. オランダの学校

(1) オランダの教育期間とシステム

下の図に示したとおり、オランダでは、教育システムが日本よりずっと多種多様である。

《初等教育》4歳～12歳

すべての子どもたちが基礎的な学力をつける。しかし日本のように決まった学区はなく、保護者は子どもが5歳になると、通学可能な学校の中から選択する。オランダでは公立・私立はあるが、国の補助により保護者の負担はほとんどない。カトリック系、プロテスタント系、イスラム系その他様々な学校があり、独自のカリキュラムで教育活動を行っている。

《中等教育》3～6年間

一般コース（進学）や職業コースに分かれており、さらに上の実務専門学校や大学進学の準備をする。

《高等教育》

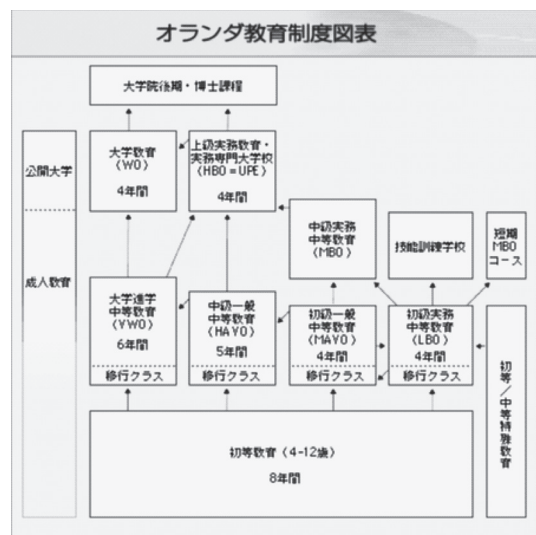
実務専門大学校と大学教育がある。実務専門大学校に進んだ生徒は、技術、応用物理、経済学、教育学などの専門分野を学ぶ。大学は伝統的に4～6年の修士課程、博士課程が中心となっており、日本とちがう点は卒業までの課程が厳しくなっているところである。

《国際教育》

オランダ各地にインターナショナルスクールが設置されており、国際教育制度やヨーロッパの教育制度、またはアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、日本など各国の教育制度に沿った教育が行われている。このほか英語の特別教育を行うイングリッシュ・ストリームという学校も数多く設置されている。

オランダの教育システムでは、子ども一人一人の能力や資質、本人の希望によって様々な選択ができる。進路を早い段階から意識させ、それにあつた学校を選ぶことができるのである。例えば、就職を希望する場合、8年間の初等教育と4年間の一般か実務中等教育の義務教育を修了するか、16歳になった年の学年が終了した時点で職業に就くことができる。ただし、週に1～2日の「パートタイム」教育コースを学校で受講するか、技能訓練学校でさらに2年間の教育を受けることが義務づけられている。希望する職業に必要な知識や技能を専門的に学ぶことができるのである。

ここで、注目すべき点は、このシステムの途中からでも進路の変更が可能ということである。つまり就職を希望



していた生徒が、大学進学に変更することができ、必要な学力を身につけさえすれば、学校を変えることができるのである。この「やり直しのできるシステム」が、自分の進路を自分でしっかり考えさせ、子どもたちの自主・自律を促していく一因になっていくと考える。

(2) 学校教育の中での「幸福感」

オランダでは、「学校がとても好き」「友だちとの関係がとてもよい」と答える子どもが非常に多い。学校の授業風景も日本とはかなり違っている。一週間に学ぶ内容は決まっているが、どの科目をどの曜日に、どのように勉強するかは、子どもたちが自分で決めることができる。また、自分の興味や理解の度合いに合わせて学ぶことができる。しかし、本当にこれで学力がつくのだろうか。ある学校の7年生（日本では5年生）の教師に質問した。すると、「子どもたちに、自分のやりたいことをやればよい、やりたいように勉強すればよい、ということ伝えると、子どもたちは自分を認めてくれたのだと安心する。そのことによって、気持ちよく、進んで学習に取り組むようになる。」とのことだった。

オランダの学校では、同じ学年をもう一度学習する、いわゆる留年が小学校でもできる。それは、本人や保護者の希望によって決めることができる。わからないまま進級するよりも、もう一度同じ学習をやり直して遅れを取り戻し苦手な教科をなくすことが大切だと考えるからであろう。そして、周りの子どもたちも自然にそれを受け入れているのだそうだ。だから、留年したことに引け目を感じることなく、自分に自信が持てるようになる。



わからないところをお互い教えあう子どもたち

こうした教育方針の背景には、子どもの幸せにつながる一つの考え方が元になっている。自分がやることを、自分で選べる子どもたちは、「オートノミー」つまり、自律の感覚を身につけることができる。この感覚によって、自然に子どもたちが社会性を身につけられる。そして、子どもたちがより幸せに、楽しく感じられるようになるというのである。

3. 子どもたちを取り巻く社会環境

(1) 家庭の中での「幸福感」

オランダの子どもたちが「自分は幸せだ」と感じるもう一つの理由は、「いつも家族と一緒にいられるから」である。子どもたちは親と過ごす時間がとても長い。しかし、親のほとんどは仕事を持っている。それなのになぜ、子どもたちは親と過ごす時間が長いのだろうか。両親が共働きの場合、多くはパートタイムで働いている。夫婦が一週間のうちに休む曜日をずらし、できるだけ子どもと一緒にいる時間をとるようにするためである。また、近年自宅勤務という形態をとる会社が増えてきたこともあって、家に両親のどちらかがいることが多くなってきた。両親がどちらも会社に出勤する日は、学童保育を利用しているが、それでも夕方6時には、家族そろって夕食をとることができる。

このような働き方ができるのは、法律の支えがあるからである。オランダでは、1996年にできた法律「労働時間差差別禁止法」によって、フルタイムで働く人もパートタイムで働く人も、時間あたりの賃金とともに社会保障も含め、待遇が全く同じになった。そのため親たちは、仕事と家庭のバランスを考え、安心して働き方を選べるようになったのである。週あたりの勤務時間が減れば、当然賃金は減るが、子育てをしている間は家庭を大切にしたいと考える親たちが多くなったのである。親が家にいる時間が長くなったことで、家庭が子どもにとって安心できる居場所になっているのである。子育てと仕事を両立させること、それが、子どもの育ちにとって大切なことだと考える親が大変多く、親子が一緒にいることで、コミュニケーションがとりやすくなり、お互いの気持ちを感じ取り

やすくなるというのである。

(2) ワークシェアの進んだ社会と子どもたち

オランダは、生き方を選べる環境を用意することによって、子どもの育ちを支えているといえるだろう。つまり、親たちがどのように家庭と仕事を両立させるか、その選択肢を増やすことによって、子どもの幸福感を高めることができると考えている。父親の子育て参加も容易になっている。学校の送り迎えに父親の姿を多く見かけることもうなずけるのである。ワークシェアが進むことによって、親たちが家庭で子どもと接する時間が保証でき、社会全体で子育てを支えているといえるだろう。子育てが終わると、親たちは希望すればまたフルタイムの勤務に戻れるのである。こうした社会は、実は子どもだけでなく、大人も「幸福感」を感じられるのではないだろうか。

4. オランダの教育から学んだこと

社会全体のしくみを変えることは難しいが、日本でも学校教育の中で、子どもたちにより幸福感を感じさせることができなかつたか考えた。日本の子どもたちの多くは、「学校は楽しい」が、「自分に自信が持てない」と感じていることが多いように思う。実際に子どもたちにアンケート調査した結果でもその傾向がみられる。オランダでは、学校教育の中で自分を見つめ、自分の進む道をしっかり考える機会を設けている。そして大人になってからも、「自分の生き方」を自分で選ぶことができるのである。日本でも、子どもたちにより多くの選択肢を与え、自分のことを考える機会を持たせることによって、自律の感覚が身につき社会性が育っていくのではないだろうか。そうすることで、他人とは違う、自分という存在を意識し、自信を持って学習に取り組み、生活できるようになるのではないかと考える。

5. おわりに

私にとって、オランダで過ごした3年間、日本とは違う文化に触れながら、オランダの教育を研修する機会を得たことは、大変貴重な経験となった。国際化が進み、これからの日本や世界を背負って立つ子どもたちの教育に携わる上で、今後この経験を生かしつつ、さらに研修を積んでいきたい。今回の派遣でお世話になったすべての方々に感謝し、報告とする。